

研修後記―一年を振り返って

相模原市役所 朝倉 浩史

カタカナ辞典

四月一日、横浜市初登庁。少し緊張きみに廊下を歩いていると、「ズルッ」両足が宙に浮かんで後ろに倒れそうになり、「横浜はこわい」・・・そんなことから横浜での研修が始まりました。

五月に何回目かの会議に出させていただきました。会議が始まってしばらくして、どなたかが「あのけ・・・ん・・・」続けて二〜三回「あのけ」何だろう？「あの毛」、「あの掛」何の「け」だろう？困ったと思っ

ていると、もう一度「あのけ」。しかし、よく聞くと「あのけ」に聞こえる。そうか「アロケ」かと安心したが、相変わらず意味が分からず、その会議はどうも調子が悪く、終了後先輩に聞くと、「アロケーション」の事

で「按分」の意味。さっそく本屋さんで「カタカナ語辞典」を買いました。この「辞典」は大変重要なもので、スペルを知らなくても辞書がひけます。それからというものの専門家の先生を交えての討論会等にも、持ち込んで膝の上に置いていました。

専門家の先生というのは、特に横文字が多いようです。その中でも建築家というのは、特に多くて、当然のように使います。メタファー、ニルバーナ、テク

ノクラフト、カオス、エクリチュール・・・など、もう少し、誰にでも分かるように話していただいたり、文章を書いていただくとかファンも増えるし、本もよく売れるのではないかと余計な心配までしてしまいます。

実は私、相模原市財務部管轄課（財務部に所属しています）から一年間、建築局建築部企画管理課に研修派遣された者で、相模原では、ほとんど、「英語禁止」状態で生活しております。

そんなことで英語に免疫性が全く無く、「アロケ」でカルチャーショックを受けてしまいました。では、相模原市をご存じない方も多くいらっしゃると思いますので、少し相模原市の宣伝でもさせていたただきたいと思

います。この比較表からも相模原市の感じがつかめると思いますが、横浜市の大体八分の一程度のスケールと考えていただくとよいと思います。

そんなことから、横浜市で試みられていることすべてを相模原市にあてはめて考えることは、少々無理が生じるので、頭の中で割り引くことが必要と考えています。

一年間という期間は、横浜市を理解するには短すぎるため、秀麗気を感じたことを思いっきりままた、少し書かせていただきます。

ブランド横浜

情報量が圧倒的に違うということを感じます。情報というものは集めようとするとなかなか

大変なものだというのは、日ごろ痛感していましたので、情報があつたまま集まってくるというのは、とてもうらやましく思います。これは、歴史と長年の職員の努力と経験の結果、ブランド「横浜」を作り上げたからではないかと考えます。

そして、横浜市は日本中から目標にされていて、追われるものの苦勞というか、プレッシャーみたいなものもあるのかな、と思っていました。そういう感じはあまりない。どちらかというと仕事を楽しむというか、何かおもしろいことは無いかと考えている。守りに入らないでど

んどん攻めているように見えます。相模原でやってみたいことが、横浜市では既に何年も前から実践されていて、ある程度結果が見える状態になっている。例えば、現在建築では計画保全というものが、一つのテーマになっています。これは、雨が漏る、タイルが剥かれるという状態になっ

てから直す（改修する）という一般的に行われている事後保全から、そうなってしまわないよ

横浜市と相模原市の比較表

	横浜市	相模原市	比較（横浜を100%）
人口	3,271,695	544,458	16.64%
平均年齢	36.0歳	34.4歳	
老齢人口比	8.3%	6.9%	
市域	433.17km ²	90.77km ²	20.95%
議員定数	94人	46人	11.80%
一般会計	1兆1,655億円	1,377億円	11.80%
職員数	32,150人	3,805人	11.83%
公共施設数	約1,300	約200	15.38%

うに計画的に保全をしていくという計画保全に切り替えるということ。横浜市では何年も前から取り組んでいることですが、後発の相模原市としては参考書が有るようなものですが、これは、追うものの強みを生かしたいと思

横浜と相模原の違い

思っていたよりコンピューター

化が進んでいないのは、正直驚きました。しかし、これもきっと何か理由があるとは思いますが・・・もともと、相模原も遅れています。

数年前から公共建築の設計者選定方式が国を含め地方自治体で話題になっていきます。建築の設計者を決める方法にも数種類有り、横浜市で行われているのが、特命随員という方法で、庁内で論議され選定された設計者と設計委託契約をする。それに対して、相模原市では、あらかじめ設計委託業者として登録している数社（設計者）を指名し、競争入札を行い一番低く入札した設計者と委託契約を行う。これを指名競争入札と言います。どちらが良いかというのは見方考え方によって異なると思います。しかし、建築をどう考えているかというところが、その分かれ目になるのではないのでしょうか。そんなことで、相模原市では、最近（博物館H三、国体プールH四）指名によるプロポーザル方式（設計者の提案を審議委員会で選択する）で、設計者を選定し、徐々にではあります

が変わっていきこうとしています。

会議がおもしろいこと。おもしろいと言ったら失礼ですが、皆さん実に自分の主張をしていて、自分の言いたいことを言っていて、人の言いたいことも聞いて、それでちゃんと最後には結論が出る。活発で生き生きした会議というのを何回も経験しました。建築セミナー（総務局職員研修所、建築局共催）を担当させていただきましたが、建築職以外の方も、建築やまちづくりに対して非常に興味をもっておられる。毎回、半数近くが建築職以外の方で、建築に対する認識の高さにとっても感心しました。おもしろかったことは、横浜市を通して他都市を見られたことと、建築家を見られたことです。これは、横浜市の方は感じないでしょうが、私のような人間はひしひしとその違いを感じました。それはかなり違った反応があるものです。これも普段の人の付き合い方、歴史、伝統の重み、都市としての魅力、その他もろもろのものの違いからくるものであると考えます。

垣間見た先進都市

また、先進都市と言われる都市の共通の問題点、といったような物もおぼろげながら見る機会もありました。それは視察に来られる自治体、或いはうかがった自治体の職員の方から良く話の出る、職員の技術力の低下という事です。理由は様々なのですが、その一つは設計も委託、工事監理も委託しているため、職員自らが設計をする事が少なくなり、当然図面を書く機会が少なくなり、積算をする機会も減るということでした。工事監理も委託しているため、現場へ行く機会が減る。

それでは、職員が何もしないように受け取られてしましますが、実際は大変忙しい。建築に限らず、行政に携わる職員の仕事が多岐にわたり、分業化が進んでいます。その結果、昔のようにただ設計をして、現場監督をしていけば良いというような時代ではなくなってしまうのではないのでしょうか。建築でも企画的な業務や調整業務等の重要性が、非常に大きくなり、

単に敷地の中に、こういう機能をいれて、このぐらいの規模のものを入れれば良いというように、そして、その技術を高めれば良いというようなことでは済まされない社会情勢になっていきます。相模原市も当然のように、そのような社会情勢と先進都市の背中を見て、同じ道をたどりかけています。しかし、ここで少し考えて、ほんの少し違う道を探すことも必要かも知れません。

もう一つ、これはあまり何処がそうだとしたことではありませんが、マニュアル社会というのも原因かなと思います。ひょっとすると皆が感じていることかも知れませんが、最近のファーストフード店での接客マニュアルのわざとらしさと、非人間的な態度。最初に行った時には、良く訓練されているなと感じたものが、二度三度と度重なる、段々鼻につくというか、お客もそのマニュアル通り進まされてしまう不快感。一辺、急にとてもない行動をしたときの店員さんの取る態度が見てみたい。それと同じことが建築にも、い

ろいろと起こっているのではないのでしょうか。企画設計マニュアル、何とか設計マニュアル、施工監理マニュアル、デザインマニュアル等、良く見ると結構周りにあるものです。これだけあるということは、需要があるということ、私もその必要性と、重要性は十分に理解しています。しかし、マニュアルの欠点は前述のように、それが全てになってしまった時にあるような気がします。ほんの少し前までは、マニュアルなどという物は無く、先輩のやることを見れば見真似でやっているうちにいつの間にか身についている。そんなパターンが普通だったので、時代の流れが段々早くなり、とにかく早くそれなりに仕事ができさせるようにと、マニュアルを使うようになってしまったのかも知れません。これからは、マニュアルをうまく活用する。或いはマニュアル自体の欠点をカバーするようにマニュアルを作る等、少し考えながら取り組むことが必要ではないでしょうか。

ぜひ相模原市へも職員を派遣してください

横浜市への派遣研修は、過去を含めて私で七人になります。

それぞれイベントの研修、まちづくりの研修等を目的にお世話になってきました。私は建築企

画を研修する目的で、企画管理課の企画係に一年間お世話になりました。企画管理課では、今

まで十五年近く仕事をしてくて、全くと言っても良いほど経験の

したことの無いことを経験させていただきました。戸惑いが全

く無かった、と言ったら嘘になります。非常に楽しく仕事を

させていただきました。一方で、今まで意味も考えずに使ってい

た言葉が妙に気になったりと、少し変わった物の見方をするよ

うになりました。環境の違う所で仕事をするのは、変な所に

力が入ったり、逆に抜けてしまったり、普通ではないかも知れ

ません。研修であるからには、何か成果を上げたいと思うのも

え込むような気がします。しかし、たった一年とはいえ、その

場所においてその空気を吸っていた事は事実で、その経験が

時間が掛かるかもしれないが、有形無形の力になって、役に立

つときがくるのでは、と思っ

ています。

横浜市の方も、一度小都市

(横浜市から見て)へ行つて、仕事をされるとおもしろいと思

います。大都市、中都市、小都市、それぞれに違った事情があ

り、その中でどのように仕事をしているか。横浜市には無い、

また違った新しいものが見つかるかも知れません。今度はぜひ

相模原市へも来ていただき、「新しい驚き」を体験していただ

きたいと思います。そして、何よりも職員の交流が盛んになることが、とてもすばらしいこ

〈あとがき〉

現代の都市には、労働のための第一の生活空間、居住のため

の第二の生活空間、そしてこれらの行動以外の活動の場として

第三の生活空間がある。この中で都市に特徴的なものは、第三

の空間であろう。

この空間を都市市民の行動からみると、遊び、消費、スポー

ツ、芸術鑑賞、など多種多用であり、また、場所で見ると盛り

場、繁華街、公園、美術館であったりする。ここではとりあえず、

第三の空間を個人が自らを創造、あるいは取り戻すための空間であると定義しておこう。

都市の発達はこの三つの生活空間を分化させる歴史でもあり、

われわれ都市生活者は、これら分化された三つの生活空間を移動することによって日常生活をおくっているといえるだろう。

大いに発揮される場である。このような生活空間の存在によって、特に現代の大都市は魅力的な場として多くの市民を引きつけてやまない。

われわれは、これまで第一、第二の生活空間の充実に努めてきたといえよう。特に急激な膨

張を続けてきた横浜のような都市においては、われわれの生活の基盤となる、これらの生活空間の整備が優先されることもや

むを得ない状況だった。

しかし、いま人口移動の面からも市民の定着が進み、市民生活の面でも「本当の豊かさ」が

目指される時代を迎えている。今後は、自らの主体性が実現

できる都市づくり、個々人の個性的なライフスタイルにあわせ

た都市づくりが求められるようになるのではないだろうか。

この特集では、都市における遊び、消費などを中心に、現代の都市における第三の空間の現状、課題、将来の可能性などを

取り上げることにより、都市の魅力づくりの一つの方向を探ってみた。

〈補原〉

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。企画調整室まで（電話六七一一二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。

